

受 験 番 号

令和五年度徳島文理高等学校入学試験問題

第一限 国 語 （その一）

注意

解答欄は問題用紙の（その九）（その十）（その十一）にあります。

解答に字数制限のある場合、句読点なども文字数に数えます。

一次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

ともだちって かぜがうつっても へいきだって いってくれるひと。

二〇〇二年に刊行された谷川俊太郎による絵本「ともだち」の一節である。「うつっても、へいき」。ほんの十八年前の絵本だが、なんだか遠い昔のことにように感じる。

確かに、かつて私たちは、うつることを覚悟で、かぜをひいた友達の家までカ**ン**ビ**ョ**ウ**ウ**しに行ったりしていた。誰かから風邪をうつされたとしても、まるでそれが天下の回りものであるかのように、「もらった」と表現していた。

コロナ禍を経験した私たちが、ふたたびこの意味での「ともだち」を持つことはあるのだろうか。いまや、親しいあいだでの会食もヒ**カ**え**ネ**ばならず、感染経路は徹底的にカ**シ**化される。感染者の家に張り紙や投石がされるなど、誹**ひ**謗**ぼう**中傷が起きているとも聞く。

この国では「うつること」まで自己責任の問題になってしまったようだ。大阪大の三浦麻子教授らの調査によれば、「感染はジ**ゴ**ウ**ウ**自得だと思ふ」と答えた人の割合は、米国では一％だったのに対し、日本では一一・五％もいたという。逆に「全くそう思わない」人の割合は、日本以外では六〇〜七〇％台だったのに対し、日本では二九・二五％にとどまっている。

怖いのは新型コロナウイルスであって、風邪やインフルエンザなら大丈夫、とはおそらくならないだろう。コロナ禍を経験した私たちは、今後、風邪やインフルエンザを含めあらゆる感染症に対して、これまで以上に警戒するようになる可能性がある。誰かが咳をしたらマ**ユ**をひそめ、熱がある人は劇場にも映画館にも入場禁止になるかもしれない。乾燥した冬場の忘年会にみんなで鍋をつつくなど、もはやできなくなるのではないか。

社会学者のノルベルト・エリアスは、文明を形づくるうえで、「不快感」が果たす役割を重視した。たとえばヨーロッパの中世では、みんなで鍋をつつくどころか、大皿にもられたシチューに全員が直接手をつっこんで食事をしていた。コップもテーブルに一つで回し飲みをしていたし、机の上に痰を吐いたり、人前で用を足したりすることも普通だった。要するに、「個」と言う概念がまだ確立していなかったのだ。

近代化とは、こうした粘膜が混じり合うような他者との濃厚接触を、「不快だ」と感じるようになることに他ならなかったのである。自己と他者のあいだに明確に線を引き、プライベートな領域を確保すること。そう考えると、現在の「3密の回避」は、こうした近代化の流れからすると当然の帰結にも思える。

確かに、体の安全を確保することは重要である。しかし、他者との接触を「不快だ」と感じるこの感性が新しい規範になったとき、私たちは安全とひきかえに何を失うのだろうか。そのことについて、きちんと考えておかなければならぬ。同時に、失われるものを別の仕方で保存する方法も。

日本語には、接触に関するふたつの動詞がある。すなわち「さわる」と「ふれる」だ。英語にするとどちらも「TOUCH」だが、それぞれ微妙にニュアンスが異なっている。

たとえば、傷口に「さわる」というと、何だか痛そうな気がする。一方で傷口に「ふれる」というと、そっと手当てをしてくれそうな印象だ。愛する人への接触は「ふれる」だが、痴漢が見知らぬ人の体に接触するのは「さわる」である。

哲学者の坂部恵は、その違いについて、自他の区別という点から分析している。すなわち、「さわる」は自分と他者、

受 験 番 号

令和五年度徳島文理高等学校入学試験問題

第一限 国 語 （その二）

あるいはさわる側とさわられる側の区別がはっきりしていて、両者がまじりあうことがない。これに対し、「ふれる」では、両者の区別が曖昧になる。「ふれる」はおのずと「ふれあう」になるのだ。それは「自己を超えて他者のいのちにふれあう」ことだと坂部は言う。

一言でまとめるなら、「さわる」は一方的で、「ふれる」は相互的だと言うことだろう。「傷口にさわる」が痛そうなのは、さわられる側の気持ちを考えていないように思えるからだ。逆に「傷口にふれる」と言うと、ふれられる側の気持ちをくんで、慎重にふれ方を選んでくれそうな気がする。そこには、相手によって自己の形を柔軟に変えようとするケアの精神がある。この姿勢を感じるとき、さわられる人はさわる人を信頼し、身を委ねる。

安全のためには、他者との物理的接触を減らさなければならぬ。しかし、私が危惧するのは、そのときに同時に「ふれる」の精神も失われてしまうのではないか、ということだ。人を信頼して、身を委ねる。言うまでもなく、これは≧X ≧論の対極にある精神である。

いや、そうした精神は、コロナ以前から失われつつあったかもしれない。ふだん学生と接するなかでの主観的な印象ではないが、彼らは常にびくびくしているように見える。ネット上では、ちよつとでも外れた発言をしたらすぐに叩かれるのだから当然だろう。コロナによって、この流れが加速してしまっているのではないかと恐れている。

では、物理的な接触がなくては、相手に「ふれる」ことはできないのか。もちろん、そんなことはないだろう。たとえば声のかけ方一つとっても、相手に「さわる」ようなかけ方と、「ふれる」ようなかけ方がある。自分の中の正しさを一方的に押し付けるような、あるいは反論の余地なく情報を伝達するような「さわる」ではなく、お互いの状態をさぐりあい、手探りで共通言語をつくりあげようとするような「ふれる」言葉。

安全は、人を管理するほうにはたらく。危ないからダメ、責任がとれないから禁止。でも「ふれる」に伴う信頼には、おおらかに人を許し、ふつうから外れていても大丈夫だという勇気を与える力がある。物理的な接触が忌避される新しい世界のなかで、いかに「接触せずふれる」かが問われているように思う。

（伊藤亜紗^{あさ}「新型コロナと文明」）

問一 波線部 a ｘ e のカタカナを漢字に直し、漢字は読みをひらがなで書きなさい。

a カンビョウ b ヒカ（え） c カシ d ジゴウ e マユ

問二 傍線部①「こうした近代化の流れ」とあるが、筆者によるとそれはどのような「流れ」であったのか、七十字以内で書きなさい。

問三 傍線部②「私たちは安全とひきかえに何を失うのだろうか」とあるが、筆者はこの後の文章中で、「何」を失うと述べているか、簡潔に答えなさい。

問四 傍線部③「失われるものを別の仕方で保存する方法」とあるが、筆者はこのあとの文章中で、何によって「保存する」ことが可能だと考えているか、四十五字以内で抜き出し、最初と最後の五字を書いて示しなさい。

問五 空欄Xに適する漢字四字の熟語を、本文中から探して補いなさい。

受 験 番 号

令和五年度徳島文理高等学校入学試験問題

第一限 国 語 （その三）

問六 本文の論旨に合うものを、次から一つ選び記号で答えなさい。

ア コロナ禍を経験した私たちは、「うつっても、へいき」という「ともだち」を持つことは決してないであろう。イ 怖いのは新型コロナウイルスだけでなくであって、風邪やインフルエンザならば大丈夫となる可能性は大いにある。ウ 日本語には接触に関するふたつの動詞「さわる」と「ふれる」があるが、英語ではその違いを表現できない。エ ふれられる側の気持ちを十分考えて慎重にふれ方を選んでくれる時、さわられる人はさわる人を信頼できる。オ ネットが登場する以前の学生たちは、客観的な事実としてまったくびくびくしているようには見えなかった。

問七 二重傍線部「谷川俊太郎による絵本『ともだち』とあるが、次の選択肢の中で絵本「ともだち」の一節として不適当なものを、本文の趣旨も考慮して、次から一つ選び記号で答えなさい。

ア ともだちって いっしょに かえりたくなるひと。
イ ともだちって おかあさんや おとうさんにも いえないことを そうだんできるひと。
ウ ともだちって みんなが いっちゃったあとも まっててくれるひと。
エ ともだちって そばにいないときにも いま どうしてるかなって おもいだすひと。
オ ともだちって ずっといっしょに いなければいけないひと。

二 次の文章は島崎藤村の『夜明け前』の一節である。主人公青山半蔵が、妻の兄で同年輩の寿平次とともに江戸へ出かける途上の場面である。半蔵は馬籠※1 まいごめの本陣の息子であり、寿平次は隣の妻籠つまごの本陣の主人である。これを読んで、後の問いに答えなさい。（本文の表記を一部改めている。）

鳥居峠はこの関所から宮の越、藪原二宿やぶはらを越したところにある。風は冷たくても、日はかんかん照りつけた。前途の遠さは曲がりくねった坂道に行き悩んだ時よりも、反かえってその高い峠の上に御嶽遙拝所※2 おんたけようはいしよなどを見つけた時にあった。そこは木曽川の上流とも別れて行くところだ。

「寿平次さん、江戸から横須賀まで何里とか言いましたね。」

「十六里さ。わたしは道中記でそれを調べて置いた。」

「江戸までの里数を入れると、九十九里ですか。」

「まあ、ざっと百里というものでしょう。」

供の佐吉も、この主人等ちの話を引き取って、

「まだこれから先に木曽二宿もあるら。江戸は遠いなし。」

こんな言葉をかわしながら、三人とも日暮れ前の途みちを急いで、やがてその峠を降りた。

「お泊りなすっておいでなさい。奈良井のお宿はこちらでございます。浪花講ななわこうの御定宿おじようやどはこちらでございます。」

しきりに客を招く声がする。街道の両側aに軒aを並べた家々からは、競うようにその招き声が聞こえる。半蔵等が鳥居峠を降りて、その麓ふもとにある奈良井に着いた時は、他の旅人等も思い思いに旅籠屋はたごやを物色①しつつあった。

半蔵はかねて父の懇意こんいにする庄屋仲間の家に泊めて貰もらうことにして、寿平次や佐吉をそこへ誘った。往來cの方へ突き出したようなどこの家の低い二階にもきまりで表廊下が造りつけてあって、馬籠や妻籠に見る街道風の屋造りはその奈良井にもあった。

受 験 番 号

令和五年度徳島文理高等学校入学試験問題

第一限 国 語 （その四）

「半蔵さん、わたしはもう胼胝をこしらえてしまった。」

と寿平次は笑いながら言って、草鞋のために水腫れのした足を盥の中の湯に浸した。半蔵も同じように足を洗って、広い囲炉裏いろりばたから裏庭の見える座敷へ通された。きのこ、豆、唐辛、紫蘇などが障子の外の縁に乾してあるようなところだ。② 気の置けない家だ。

「静かだ。」

寿平次は腰にした道中差しを部屋の床の間へ預ける時に言った。その静かさは、河の音の耳につく福島あたりにはないものだ。その庄屋の主人は、半蔵が父とはよく福島の方で顔を合わせると言い、この同じ部屋に吉左衛門を泊めたこともあると言い、そんな縁故から江戸行きこゝろの若者をよろこんで歓待もてなそうとしてくれた。ちょうど鳥家のさかりの頃で、木曾名物の小鳥でも焼こうと言ってくれるのもその主人だ。鳥居峠の鵜は名高い。鵜ばかりでなく、裏山には駒鳥、山郭公やまほととぎすの声が聴かれる。仏法僧も来て鳴く。ここに住むものは、表の部屋に向こうの鳥の声を聴き、裏の部屋にこちらの鳥の声を聴く。そうしたことを語り聞かせるのもまたその主人だ。

半蔵等は同じ木曾路でもずっと東寄りの宿場の中に来ていた。鳥井峠一つ越ただけでも、親達や妻子のいる木曾の西のはずれはにわかになんて遠くなった。しかしそこは何となく気の落ち着く山の裾で、旅の合羽も脚絆も脱いで置いて、田舎風な風呂に峠道の汗をわすれた時は、いずれも活き返ったような心地になった。

「ここの家は庄屋を勤めてるだけなんです※3。本陣問屋は別にあるんですね。」
「そうらしい。」

半蔵と寿平次は一風呂浴びた後のさっぱりした心地で、奈良井の庄屋の裏座敷に互いの旅の思いを比べ合った。朝晩はめつきり寒く、部屋には炬燵が出来ているくらいだ。寿平次は下女が提げて来てくれた行燈を引きよせて、そのかげに道中の日記や矢立てを取り出した。藪原で求めた草鞋が何文、峠の茶屋での休みが何文というようなことまで細かくつけていた。

「寿平次さん、君はそれでも感心ですね。」
「どうしてさ。」

「妻籠の方でもわたしは君の机の上に載ってる覚え帳を見て来ました。君にはそういう綿密なところがある。」
④

どうして半蔵がこんなことを言い出したかというに、本陣庄屋問屋の仕事は将来に彼を待ち受けていたからで。二人は十八歳の頃から、既にその見習いを命ぜられていて、福島の役所への出張といい、諸大名の送り迎えといい、二人が少年時代から受けて来た薫陶はすべてその準備のためでないものはなかった。半蔵がまだ親の名跡を継がないのに比べると、寿平次の方は既に青年の庄屋であるの違いだ。

半蔵は嘆息して、
「吾家の阿爺の心持ちはわたしによく解る。家を放擲してまで学問に没頭するようなものよりも、好い本陣の跡継ぎを出したいというのが、あの人の本意なんです。阿爺ももう年を取っていますからね。」

「半蔵さんは溜め息ばかり吐いているじゃありませんか。」

「でも、君には事務の執れるように具わってるところがあるから好い。」

⑤ 「そう君のように、むずかしく考えるからさ。庄屋としては民意を代表するし、本陣問屋としては諸街道の交通事業に

受 験 番 号

令和五年度徳島文理高等学校入学試験問題

第一限 国 語 （その五）

参加すると想って見たまえ。兎に角、働き甲斐はありますぜ。」

囲炉裏ばたの方で焼く小鳥の香氣は、やがて二人のいる座敷の方まで通って来た。夕飯には、下女が来て広い炬燵板の上を取り片付け、そこを食卓の代わりとしてくれた。一本つけてくれた銚子、串差しにして皿の上に盛られた鵜、すべては客を扱い慣れた家の主人の心づかいからであった。その時、半蔵は次の間に寛いでいる佐吉を呼んで、

「佐吉、お前もここへお膳を持って来ないか。旅だ。今夜は一杯やれ。」

この半蔵の「一杯」が佐吉をほえませた。佐吉は年若ながらに、半蔵よりも飲める口であったから。

「俺は囲炉裏ばたで頂かず。その方が勝手だで。」

と言つて佐吉は引きさがった。

「寿平次さん、わたしはこんな旅に出られたことすら、不思議のような気がする。実に一切から離れますね。」

「もうすこし君は楽な気持ちでも好くはありませんか。まあ、その盃でも乾すさ。」

若いもの二人は旅の疲れを忘れる程度に盃を重ねた。主人が馳走振りの鵜も食った。焼きたての小鳥の骨を噛む音も互いの耳には楽しかった。

「しかし、半蔵さんもよく話すようになった。以前には、ほんとに黙っていたようですね。」

「自分でもそう思いますよ。今度の旅じや、わたしも平田入門を許されて来ました。吾家の阿爺もああいう人ですから、快く許してくれましたよ。わたしも、これで弟でもあると、家はその弟に譲って、もつと自分の勝手な方へ出て行つて見たいんだけど。」

「今から隠居でもするようなことを言い出した。半蔵さん——君は結局、宗教にでも行くような人じゃありませんか。わたしはそう思つて見ているんだが。」

「そこまではまだ考えていません。」

「どうでしょう、平田先生の学問というものは宗教じゃないでしょうか。」

「そうも言えましょう。しかし、あの先生の説いたものは宗教でも、その精神は所謂宗教とはまるきり別のものです。」

「まるきり別のものは好かった。」

炬燵話に夜はふけて行つた。ひっそりとした裏山に、奈良井川の上流に、そこへはもう東木曾の冬がやって来ていた。山気は二人の身にしみて、翌朝もまた霜かと思わせた。

注※1 馬籠……中山道の宿駅。「妻籠」「奈良井」「福島」も中山道の宿駅。

※2 御嶽……木曾御嶽山。信仰の対象になっていた。

※3 本陣問屋……「本陣」は大名などが宿泊する宿。「問屋」は宿場の人馬の継ぎ立てなどをする所。

※4 矢立て……携帯用の筆。

※5 平田……国学者平田篤胤。

受 験 番 号

令和五年度徳島文理高等学校入学試験問題

第一限 国 語 （その六）

問一 波線部 a～e の漢字の読みをひらがなで書きなさい。

- a 軒 b 懇意 c 往来 d 嘆息 e 隠居

問二 傍線部①「物色」・②「気の置けない」の語句の本文中における意味として最も適当なものを、次の各群からそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。

① 物色

- ア 適当なものを探し求めること
イ うろうろとさまようこと
ウ あちこち物珍しげに見てまわること
エ 何かあら探しをすること
オ 気に入ったものを決めてしまうこと

② 気の置けない

- ア 油断のならない
イ 親しみのもてない
ウ 遠慮のいらぬ
エ 騒々しさのない
オ 気に入らない

問三 傍線部③「半蔵が」の「が」と同じ用法の助詞を、本文中の二重傍線部 A～E のうちから一つ選び、記号で答えなさい。

問四 傍線部④「君にはそういう綿密なところがある」は、「寿平次」の覚え書きについての半蔵の感想であるが、「寿平次」の「綿密なところ」はこのこと以外にどのような点があげられるか。具体的に二十五字以内で答えなさい。

問五 傍線部⑤「そう君のように、むずかしく考えるからさ」とあるが、次の i・ii の問いについて答えなさい。

i 「寿平次」は「半蔵」がどのような点で悩んでいると受け止めているか。三十字以内で答えなさい。

ii 「半蔵」は実のところどのような点で悩んでいるのか。三十字以内で答えなさい。

問六 本文の作者・島崎藤村の作品を次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 田舎教師 イ 舞姫 ウ 蟹工船 エ 杜子春 オ 破戒 カ 斜陽

令和五年度徳島文理高等学校入学試験問題

第一限 国 語 （その七）

三 次のＡ・Ｂの古文を読んで、後の問いに答えなさい。

※¹ 徳大寺右大臣殿、檢非違使の別当の時、中門にて使庁の評、定行はれける程に、官人章兼が牛はなれて、庁の内徳大寺右大臣殿が、檢非違使庁の長官であつた時、
※⁴ 大いり ざ はまゆか ※⁵ へ入りて、大理の座の浜床の上にのぼりて、にれうちかみて臥したりけり。重き怪異なりとて、牛を陰陽師のもとへ遣長官の座席である浜床の上に 反芻して
※⁸ ① おのおの ※² ② 是あれば、いづくへかのぼらざらん。 厓弱の官はすべき由、各申しけるを父の相国聞き給ひて、「牛に分別なし。足あれば、いづくへかのぼらざらん。厓弱の官人、たまたま出仕の微牛を取らるべきやうなし。」とて、牛をば主^③に返して、臥したりける畳をば換へられにけり。たまたま出仕に用いた貧弱な牛を
あへて凶事^{きやうじ}なかりけるとなん。
少しも

「怪しみを見て怪しまざる時は、怪しみかへりて破る。」と言へり。 『徒然草』二〇六段

注※¹ 徳大寺右大臣殿……藤原公孝。「檢非違使の別当」を務めていたのは十五歳から十七歳の頃。
※² 檢非違使……檢非違使庁。京中の警察・裁判を担当した役所。
※³ 中門……寢殿から中門に至る廊下の間。会議室として用いた。
※⁴ 大理の座の浜床……「大理」は、檢非違使庁長官の唐風の呼び名。「浜床」は、長官用の座席として設けられた台で、広さ二畳高さ二尺（約六〇㎝）程ある。
※⁵ にれうちかみて……反芻して。一度飲み込んだ食物を再び口中に戻し、噛み直して再び飲み込んで。
※⁶ 怪異……怪事件。
※⁷ 陰陽師……陰陽寮に属し、吉凶を占った役人。
※⁸ 父の相国……公孝の父親である太政大臣藤原実基。「相国」は、太政大臣の唐風の呼び名。
※⁹ 厓弱の官人……貧しい下級役人。

※¹ かめやまどの ※¹ 亀山殿建てられんとて、地を引かれけるに、大きな蛇、数も知らず凝り集まりたる塚ありけり。この所の神地ならしをなさつたところ、 一か所に集まつている塚 この土地の神である
※² ちよくもん ※² なるいさつを後嵯峨院に申し上げたところ、 この土地の主であつたものなら
なりと言ひて、事の由を申しければ、「いかがあるべき。」と勅問ありけるに、「古くよりこの地を占めたるものならば、さうなく掘り捨てられがたし。」と皆人申されけるに、この大臣一人、「王土にをらん虫、皇居を建てられんに、むやみに 鬼神はよこしまなし。咎むべからず。ただ皆掘り捨つべし。」と申されたりければ、塚を崩何のたたりをかなすべき。 神靈は道理に外れたことはしない。気にすることはない。
※⁴ ④ して、蛇をば大井川に流してけり。さらにたたりなかりけり。 『徒然草』二〇七段
※⁵ ⑤ 流してしまった。 まったく

注※¹ 亀山殿……後嵯峨院（後嵯峨上皇）が嵯峨に造営した仙洞御所。
※² 勅問……天皇のお尋ね。後嵯峨院のお尋ね。
※³ 王土……天皇統治の国土。

受 験 番 号

令和五年度徳島文理高等学校入学試験問題

第一限 国 語 （その八）

問一 傍線部①「各申しける」とあるが、どのようなことを「申し」たというのか、次の中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

- ア 警察・裁判を担当する検非違使庁で、長官の座が汚されたことは、法秩序を揺るがす事態であるということ。
イ 大理の座に登っている牛は、下級役人の章兼の牛であり、管理不行き届きと言わざるを得ないということ。
ウ 長官の座るべき浜床に牛が寝そべることは許しがたいことであり、すぐに処分すべきであるということ。
エ 重大な怪事件であるから、章兼の牛を陰陽師のもとに送り届け、吉凶を占わすべきであるということ。

問二 傍線部②「足あれば、いづくへかのぼらざらん」とあるが、現代語訳として、次の中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

- ア 牛には足があるが、どこに登るのだろうか。
イ 牛には足があるが、どうして登らないのだろうか。
ウ 牛には足があるので、どこにでも登るだろう。
エ 牛には足があるので、どうしても登るだろう。

問三 傍線部③「主」とあるが、誰を指すのか、答えなさい。

問四 傍線部④「ただ皆掘り捨つべし」とあるが、どうしてそのように命じたのか、理由として最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

- ア 幾世代も住み続けてその土地の主となっているものを、むやみに掘り捨てることは許されないから。
イ 国土はすべて天皇統治の土地であり、その土地に生きるものは、皇居造営にたたるはずはないから。
ウ 蛇がこの地に住む神霊であるなら、道理に外れたことは行わないので、気にかけることはないから。
エ 天皇統治の国土に住むものが皇居造営にたたるはずはなく、神霊は道理に外れたことをしないから。

問五 傍線部⑤「さらにたたりなかりけり」とあるが、同様の内容を表す部分をAの文から一文で取り出しなさい。

問六 波線部「この大臣」とあるが、Aの文に登場する「父の相国」と同一人物であり、「藤原実基」を指す。この二つの話から「藤原実基」は、どのような考え方を持つ人物か、説明しなさい。

問七 『徒然草』の作者名を漢字で答えなさい。